

日本 戦闘の 者



荒谷 卓 (あらや たかし)
 生年月日：昭和34年秋田県出身
 略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
 平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
 平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
 著書：『戦う者たちへ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房／『サムライ精神を復活せよ』並木書房
 熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>



米陸軍特殊作戦コマンド・JFK Special Warfare Center & School (ジョン F.ケネディ特殊戦センター&スクール：JFKSWCS) が所在するフォートブラッグ (Fort Bragg) 基地について説明しよう。ノースカロライナ州 Fayetteville (Fayetteville) の北西部に位置するフォートブラッグ基地及び演習場は、650km以上の面積を有し、50,000名以上の軍人や軍属が勤務する世界最大規模の軍事施設である。フォートブラッグ基地には、第18空挺軍団司令部と第82空挺師団、米陸軍特殊作戦コマンドと第3及び第7特殊戦グループや統合特殊作戦コマンドと第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊 (デルタフォース) 等重要な部隊が所在する。演習場は長径50km以上にも及ぶ多様な実射実爆レンジで構成されており、小火器から野砲までの実射のみならず、対地航空支援射撃の実射や世界中の戦域をモデルにした市街地実射訓練場などがあり、当時は、アフガンやイラク等に派遣される部隊の任務直前の実射実爆リハーサルなどが頻繁に実施されていた。さらにそこから少し離れた場所には、特殊作戦訓練専用の演習場キャンプ・マッコール (Camp Mackall) がある。ここが、グリーンベレー養成のベース・キャンプとなる。JFKSWCSでは、非対称的脅威に適切に対処できるオペレータの養成や高度な特殊作戦スキルを教育する。

特殊作戦部隊は、戦力の量より質を重視する。したがって最初の訓練コースを「Qコース (Qualify Course)」と呼ぶ。Qコースは、6つのフェーズから構成されている。

フェーズ1は、セレクションと言われる適性選考で年間8回実施されている。選抜訓練には、陸・海・空及び海兵隊の現役兵士のほか、予備役そして一般市民で特殊戦兵士を望む者は職業、年齢を問わず誰でもこの選抜に挑むことができる。この選抜訓練には、毎回200名から400名程度の参加者がある。

訓練参加者の中から、資格適正検査 (犯罪歴、心理学の専門家による面接、知能検査、体力検定) の不合格者、必要訓練課目の基準未到達者及び訓練継続意思のない者、最終面接試験での不合格者が排除され、これらを全てクリアした合格者 (平均40%) がフェーズ2以降の訓練に進むことができる。

事後の訓練も含め、訓練間の安全管理の手段は、安全を確保するために必要なことを教えることであり、一度教育を受けた後は全て本人の責任となる。訓練メニューは如何に天候が悪くても予定通り進められ、怪我・病気で参加できなくなればその時点で不合格となる。自己の安全管理ができないものは排除されるというシステムである。

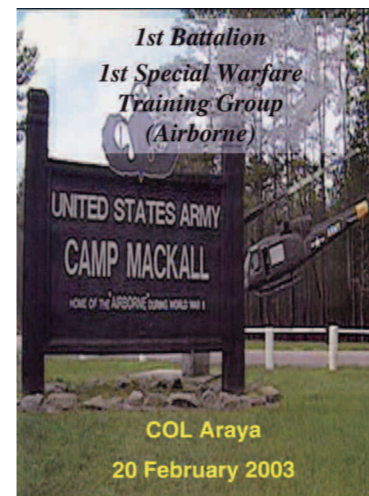
最終面接では、自己の行動に対する客観的分析とその改善策の創意、判断が難しい問題への対応等の評価を重視して面接が実施される。

選抜コースの意味は、特殊作戦戦士を希望するという本人の希望意外の条件もつけず受け入れ、如何に本人の意思が堅固で、精神状態が健全で安定しており、優れた知力 (分析力と創造力) と一定以上の体力を有するかを確認するためのものである。一般に特殊作戦は少数で遂行され、かつ各人が極めて得意な技能を期待されているため、一人のミス全体でリカバーはできない。したがって、万が一にも能力のないものがその中に含まれてはならないため、選抜はきわめて厳正に行われている。確実に特殊戦戦士になりうると判断される者のみを選抜し、怪しいものは一切排除する。したがって、常に部隊の編成定員は充足されないそうであるが、質を重視することが最も重要であり、数は望ましい目標ということである。この点は重要であり、特殊戦は数で勝負するのではなく質の戦いである。

また、選抜試験は、体力的な計測によるといよりも、本人の意思、資質、精神的な安



これらは、米陸軍特殊作戦コマンド (グリーンベレー) JFKSWCSの訓練を終了し特技認定を受けた証明書の数々。



特殊作戦訓練専用の演習場キャンプ・マッコール。

定性等の精神的側面及び、分析力、創造力等知能的側面をより重視して評価する必要があり、そのためには心理学の専門家のサポートや知的要素を評価できる訓練シナリオを考えて選抜を実施する。

選抜に当たっては、あらかじめ合否判断の特定のマニュアルを決めてしまうと、同じようなタイプの隊員が集まる危険性があり注意を要する。努めて多様な資質の優秀な隊員を選抜すべきである。特に「こう言われましたから」「こう教わりましたから」「規則でこうなってますから」「今までこうやって来ましたから」という答えを出すような知力のない隊員は明らかに不適である。自己の行動を客観的かつ詳細に分析しそれをすぐに改善できる能力が重要であり、恒常的に事故、怪我、病気の多い隊員も排除される。

フェーズ2は、小部隊の戦術行動 (Small Unit Tactics) だ。野戦から市街戦までの戦術行動 (情報、後方支援、航空機誘導、空挺・空中機動等を含む) を完全にインソートされ

た状況下に訓練する。フェーズ3は、特技訓練。オペレーション、ウエポン、エンジニア、コミュニケーション、メディック等の専門教育である。フェーズ4は、「ロビン・セイジ」と呼ばれる作戦チームによる非通常戦の総合訓練である。フェーズ5は、語学教育。フェーズ6は、テロリストなどに捕まった場合の捕虜としての対処行動だ。

このほかに、特殊戦兵士のためのアドバンスコースがあり、フォートブラッグにおいては、特殊戦狙撃課程 (SPECIAL OPERATIONS TARGET INTERDICTION COURSE) や市街地において特殊戦を遂行する特殊技能を養成する特殊戦上級技術過程 (SPECIAL FORCES ADVANCED RECONNAISSANCE, TARGET ANALYSIS & EXPLOITATION TECHNIQUES COURSE) 等がある。狙撃課程は、単なる狙撃術ではなく、インテリジェンスからオペレーション全体をトレーニングする。市街戦も、情報活動からCQB、爆破を含む各種ブリーチングなど広範囲に及ぶ教育である。フォートブラッグ以外では、MILITARY FREE FALL SCHOOLがアリゾナ州ユマに、WATERBORNE OPERATIONS COMBAT DIVE QUALIFICATION COURSEがフロリダ州キーウエストに所在する。

俺は、これらの訓練に参加する傍ら、フォートブラッグでいるんな人たちの出会いがあった。デルタフォース創設メンバーで日系アメリカ人のWade Ishimotoさん。彼は、俺が特殊作戦群長に就任した年にカウンター・テロリズムの「ザ・マン・オブ・ザ・イヤー」にも輝いた。現在はハワイで合気道の指導をしている。日本ではおなじみの元特殊部隊曹長の三島瑞穂さんは、グリーンベレーのベテランズとの交流で頻りにフォートブラッグに来ており、よく食事に誘ってくれた。三島さんからは、グリーンベレー創設期の話をたくさん聞くことができた。彼は、特殊部隊に入る前は第82空挺師団に所属していたそうで、グリーンベレーがフォートブラッグに新編されると聞いて、グリ

ーンベレーを希望したそうだ。そうすると「オール・アメリカンズ」を自負する第82空挺師団のメンバーから裏切り者といわれ、ベース (基地) の中で会うとコテンパンにやられたりしたそうだ。正に、習志野で起きたことと同じような話で、どこの国も同じようなもんだと思ったものだ。

また、映画「ブラックホーク・ダウン」(米2001年)で有名になった「モガデイスの戦闘」で、ソマリア民兵組織モハメッド・ファッラ・アイディード将軍の側近二人を捕らえるミッションで作戦を遂行していたデルタフォースチームの一人 (当時狙撃手) とも親しくなり、自宅での食事や彼の好きなカントリー・ミュージックのコンサート等にも誘ってもらった。彼の自宅では、モガデイスの戦闘で亡くなったゴードン曹長の遺品も手に取って見せてもらった。

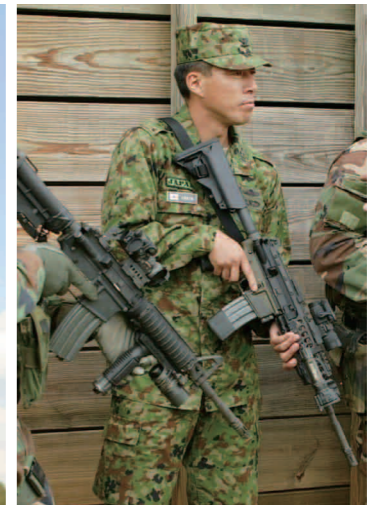
特殊作戦は通常の軍事作戦とは全く異なる。自衛隊では絶対に触れることがない異次元の作戦である。それだけに、特殊作戦に関する教育訓練はどれも斬新で創造力を掻き立てるものである。それに加えて、こうした、スペシャル・オペレーション実務経験者から直接聞く話はとても貴重な体験であった。

空挺団に所属していた時に、小野田寛郎さんの小野田自然塾創設を手伝って福島県塙町でランドナビゲーションコースの設計施工や、施設の設置の手伝いをしながら、小野田さんのルバング島での作戦経験を学んだ時も多く学びがあったことを思い出す。

殊作戦は常にリスクに直面している。俺が、グリーンベレー留学間も訓練間に死亡事故があった。特殊作戦には死がつきものである。しかし、実戦を予定した死と隣り合わせの訓練は任務上必須であり、これを避けていたのでは実戦任務は遂行できない。では、如何にして安全を確保するのか。それは、リスクがリスクで無くなるまで作戦能力を向上させることだ。事故を起こすのは実力が足りないからだ。特殊部隊の戦闘員足り得るのは、自らの実力でリスクをなくすることができる者だ。



M249SAWを構える筆者。フォートブラッグでの訓練中の写真だ。



M4カーブיןを持ち、市街戦の訓練をする筆者。